中学校における学習習慣の形成過程と学習環境（□研究プロジェクト報告 □研究開発部門）

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>村瀬 公胤</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>ネットワーク □年報</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15083/00036812">http://doi.org/10.15083/00036812</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
中学校における学習習慣の形成過程と学習環境

報告者 センター研究員（東京大学基礎学力研究開発センター特認研究員） 村 瀬 公 豊

本研究は、学校臨床総合教育研究センターと基礎学力研究開発センター（21世紀COEプログラム）学校機能分析ユニットの共同プロジェクトとして平成15年春より企画され、平成16年1月現在、進行の途上にある（秋田喜代美・村瀬公豊・市川洋子による共同研究）。その課題は、生徒の学力や学習習慣の形成と学校および家庭の学習環境との関連を探ることである。研究遂行にあたっては都内の私立京北学園中学校（以下「K中学」とする）と連携し、中学1年生の授業観察や質問紙調査からデータを得るとともに、教員と密接な意見の交換を通じて改善の方策を探究するスクールペイズドなアクションリサーチのスタイルを志向した。

今年度の主な研究活動は1学期と2学期の2期に分かれており、それぞれにおいて授業観察（入学式やガイダンスを含む）と質問紙調査（生徒および保護者を対象とした）を行った。これらの観察データに基づき、中学校入学後の生徒たちがどのように学習習慣を形成するのかについて明らかにしたのが今年度の成果である。以下にその概要を述べる。

第一に、観察と資料の分析から、K中学では私立中学という特性を生かし、仕切り方的機会として入学をとらえ、生徒の個別のニーズに教師が対応しながら学習習慣の確立を図っていることを指摘した。そのために、[授業実施]—[家庭学習としての宿題]—[宿題を評価するシート]と短期の「学習サイクル」のシステムが1学期に形成されていくことが、観察から明らかになった。また、K中学では、学年の先生が一つの職員室で生徒の話題をすることが緩和し強いこともこうした教師によるサポートを有効なものにしていた。

第二に、学力等を等しく想定した学級で成績差が生じていく問題を考察した。4月当初の学級での談話の相違を事例にして検討した結果、成績差の要因としては個人差のみではなく授業中における談話のあり方も関わっていることが示唆された。教師が伝達においてどれだけ生徒の発言をその中に取り込むいくのか、あるいは伝達的な場面以外の場面をどのようにしてより顕在化していくのか、また評価システムのあり方と教室談話形態のあり方との関連も今後さらに検討が必要である。

第三に、質問紙調査のデータから、学級内の生徒の学力差の要因を検討した。その結果、この要因はいわゆる教科知識の習得の差だけではなかった。1.その学校の学習習慣に適応すること。2.その学習方法を意識化できること。3.仲間という人が学習を豊かにする持つことという3つの要因をデータの分析から指摘することができた。そして、家庭においては、学校学習過程に関与するのではなく、学習を支える家庭学習も重要であることが示唆された。

本研究では、観察と資料の分析を通じて学習習慣の形成についての理解を深めた。その結果、学習習慣の形成過程においては、教員の授業態度、生徒の学習習慣の形成、家庭の学習環境の関与が重要であることが示唆された。今後、これらの課題に対応するためには、更なる研究が必要であると考える。